「月の輪古墳」編集部編
月の輪古墳

横山浩一

一

記録映画で有名な岡山県月の輪古墳の調査報告である。

月の輪古墳は、あまりにも有名なため、巨大な古墳であるかのように誤解している人も多いが、全国的に見れば、さして大規模とも内容豊富であるともいい難い。それにもかかわらず、この古墳が大がかりな発掘の対象に選ばれたのは、山間部の自己完結的な小盆地における政治的統一の過程を調べるモデル地域として、この地域がとりあげられたからである。

一九五三年に行われた発掘は、学者と村民の密接な協力によつて進められ、その運営法をめぐつて、はげしい賛否両論がたたかわされたことは、今もなお記憶にのこる事件である。したがつて調査終了後も、この運営方法が、どのような学問的成果を生み出し得るであろうかとの関心から、報告書の刊行が久しく待ち望まれていたのであつた。

七年の歳月をついやして完成された本書は、四〇〇頁に九ポ活字のぎつしりとつまつた大冊である。その大きいことにも驚かされるが、普通の報告書ではわずかな部分を占めているにすぎない考説が、頁数にして、全体のなかば以上を占めていることにも驚かされる。

本書の構成は、つぎのようになつている。

序　説　月の輪古墳をめぐる環境
第1部　調査の記録
第2部　技術史的ならびに自然科学的研究
第3部　考古学的検討
第4部　年代と性格
第5部　発掘の経過

このうち、第1部と第5部が事実報告に、その他の部分が考説に当るわけである。

編集に当つて共同研究の態勢がとられたことは、調査以来の事情から見て当然のことである。執筆者は、自然科学者をも含めて、総数十七名の多くにのぼつている。

二

まず、事実報告の部分から見てみよう。

この古墳の発掘方法のなかで、最も劃期的なのは、墳丘表面の全面発掘を行つたことであろう。葺石・埴輪など墳丘表面の施設については、一部分だけを発掘して全体を推測するのが、これまで普通にとられてきた発掘法である。もちろん、全面発掘の必要なことは、前々から痛感されていたのであるが、莫大な労力を要するため、あえてこれを行う人がなかつたのである。

全面発掘の成果としては、まず葺石の検出がある。葺石の施し方に疎密があり、外側からながめて、最も眼に入りやすい部分が丁寧に葺かれている事実などは、全面発掘によらなければ到底知ること

ができなかつたであろう。そのほか、墳丘の形状や、埴輪の配列状況が全面的に検出され、築造技術や計画性を考えるのに必要なデーターが、綿密に集められている。

表面の全面発掘ばかりでなく、墳丘の各所にトレンチを掘つて、築成状況の精査を行い、予想しなかつた新事実を発見している。すなわち、墳丘の上部を構成している盛土は、一度に盛られたのではなく、まず下半が盛りあげられ、その頂上に紅い礫をしいてある期間放置したのち、その中央を掘り下げて埋葬を行い、そののちに盛土の上半を完成していることがたしかめられた。また造り出しについても、断面の観察によつて、築成当初からの計画であり、のちに付加されたものでないことを確認している。

このような大工事は、延一万人に達する地元民の協力があつて、はじめて可能になつたものと思う。地元の方々の熱意と、調査者の問題意識の強烈さに、あらためて敬意を表したい。

三

本書の大きな特色の一つは、技術史的研究に相当のスペースを割いていることである。とりあげられた諸対象のうち、人骨・木材・獣皮は、資料の腐朽がひどかつたため、比較的簡略にとりあつかわれているが、織物技術と鉄器の成分については、報告者が以前から行つてきた研究の、まとめもしくは中間報告ともいえる論説がのせられている。筆者には、これ等の業績を批評するだけの知識はないが、技術史的研究がいかにあるべきかについて、教えられるところの多い論説である。

「考古学的検討」の部では、事実報告で述べられた諸事象が、もう一度まとめて検討される。とりあげられる問題は、月の輪古墳に関係したあらゆることがらにわたつており、そのなかには解決を今後に残した問題も多い。それ等のすべてを紹介することは困難であるから、ここでは、特に重要な埴輪の問題について述べておこう。

埴輪については、本書で二つの新しい発言がなされている。

その一つは、埴輪の工人の組織についてである。この古墳の形象埴輪と円筒埴輪の間には、製作技術のうえで、優劣の差が認められるが、報告者は、埴輪の需要の少いこの地域に埴輪の専門工人がいなかつたので、古墳の営造に当つて、南部平野地帯から専門工人をまねき、彼等に形象埴輪を、彼等の指導下にある地元の土師器工人に円筒埴輪を製作させたため、でき上りに優劣の差が生じたのであると推定している。そしてさらに注意すべきは、吸水率と気孔率の検査によると、岡山県南部の金蔵山古墳では、形象埴輪と円筒埴輪がほぼ似通つた数値を示し、すべての埴輪が専門工人によつて作られたと思われる状態にあるのに対し、月の輪古墳では、形象埴輪と円筒埴輪の間に明らかな差が認められ、前述の外見上の差と照応することである。これは全く新しい着眼点であつて、いまのところまだわずかな資料が検査されただけであるが、将来の成果を期待されてよい。

埴輪に関する第二の重要な発言は、その起源についてである。本書は、土留説・柴垣模倣説・奉献土器仮器化説などこれまでの埴輪起源説を、すべて承服できないとしてしりぞけ、そのかわりに、埴輪は土器の棺を象徴化したものであり、「初期の円筒埴輪の樹立は、

首長の棺とともにある集団成員の棺という、かつての弥生時代の集団墓地での関係を、高度に抽象化して表現したもの」とする、大胆な仮説を提出している。しかし、もともと地表下に埋没された土器棺が、地表に樹立されるにいたるというのは、あまりにも大きな飛躍である。その中間段階として、報告者が想定している「円筒埴輪が墳丘斜面をめぐつてあちこちに点々と埋没されている」ような状態が、発掘によつて実証されないかぎり、直ちには承認できない。この仮説は、第5部で述べられる発生期の古墳の性格づけとも、また報告者がひそかに考えていると察せられる北九州勢力による畿内征服の可能性とも関連があり、影響するところが大きいので、慎重な再検討を望みたい。

四

「年代と性格」の部分では、まず月の輪古墳の年代を、中期前半末～後半初と考定している。この結論自体に異論はないにしても、この章での年代考証が、第3部、特に銅鏃と鏡の章での年代考証と、全く無関係に行われているのは不思議な感じを受ける。

年代論につづく章では、調査開始の際に設定された問題にこたえて、月の輪地域の政治的統一の過程が論じられる。月の輪の盆地は、大きな川によつて三つの地区に分けられているが、報告者は遺跡の分布を検討して、古墳時代にはすでに盆地全体が、政治的に統一されていたことを論証し、さらにその統一過程で、治水事業の果した役割を強調する。すなわち、治水技術の未熟な弥生式時代には、大きな川は両岸を分離する役割を演じたのに対し、河水の灌漑への利用と、河道の制御が可能になつた古墳時代になると、川を媒介として両岸の集団が利害関係を持つようになり、そこに利害の調整者として、首長が政治的統一に乗り出す条件が生まれるというのである。

この論は、抽象的な形ではこれまでも考えられたことがあるが、本書の場合は、古墳時代の治水技術についての具体的な評価を含んでいるので、特に迫力が感じられる。治水技術については、註で述べているだけなので、見逃されやすいが、報告者は井堰による河川利用が溜池灌漑より古いと考え、古墳時代の土木技術は、すでに前者の可能な段階に達していたと述べている。

最後の章は、発生期の古墳をば、首長を中心とした共同体の集団祭祀の場であると規定し、それが権威を誇示する手段としての発展期の古墳に転化してゆく過程を論じている。述べられているところは、報告者である近藤氏が、すでに発表した考えと、基本的には変らないが、発生期の古墳の集団祭祀の場としての性格を、特に強調している点に新しさが見られる。だが、その際主要な論拠になつている「発生期の古墳は一地域に一基しかない」という原則が、まだ完全には実証されていないところに、若干の不安が感じられる。

以上、報告者が最も苦心したらしい部分、異論のありそうな部分だけをぬき出して批評したので、報告書を読んでおられない方にはわかりにくいと思うが、お許しを願いたい。

（B5判四二一頁　図版七八　挿図一八六　表七〇　一九六〇年十一月二十三日　月の輪古墳刊行会刊）